
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 34

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 661. 2017年最初のクネン先生とのミーティング
- 662. 夢見と覚醒の狭間
- 663. 既踏の道と未踏の道
- 664. 習慣的・突発的な文章執筆
- 665. オランダの歯医者にて
- 666. 発達理論の普及に伴う護身のための知識
- 667. Convergent Cross-Mappingについての備忘録
- 668. 衝迫さを超えて
- 669. 発達の介入の効果に関する測定評価
- 670. 巨人の肩と生きた絵画
- 671. 九月から
- 672. 遅く起きた週末と物語
- 673. 「複雑性と人間発達」の最終試験へ向けて
- 674. 物語と変容
- 675. 孤独と客死
- 676. だから日記を読み、日記を書く
- 677. 触れられぬもの、そして楽しむことについて
- 678. 闇との闘いと新たな活動エネルギー
- 679. 知人の書籍とカッパ係数の算出
- 680. 丸い日本語、四角い英語

今日の午前中に行われたクネン先生とのミーティングは、新年早々のものであるにもかかわらず、とても密度が濃く、今後の研究を大きく推進させてくれるものであった。支度にあつた時間がいつもよりかかってしまい、先生の研究室に向かう最中を通るノーダープラントソン公園を少しばかり小走りしていた。雪道と化した公園を抜け、社会科学キャンパスに到着し、無事に定刻通りに先生の研究室のドアを叩いた。

先生の研究室に入り、挨拶を交わすと、まずはお互いの年末年始の話となった。私はもちろん日本に一時帰国した話をし、先生はフローニンゲンの北部に位置する島に訪れた話をしてくれた。その後、先生に日本茶の手土産を渡し、早速私の研究に関する話を行った。実際に修士論文を提出するのは、五ヶ月後のことなのだが、先生の助言と私の意向もあり、昨年の終わりに少しづつ論文を執筆し始めていた。

具体的には、論文の構成を練り、特にイントロダクションと研究手法に関するセクションを書き始めていたのである。まさに今日添削をしていただいたのは、イントロダクションと研究手法の前半部分である。論文提案書を執筆する段階から、この提案書に記載する内容を論文のイントロダクションに活用しようという算段であつたため、イントロダクションに関しては添削される箇所が何もなかった。また、研究手法の前半部分に関しても、先生から修正されるような箇所はほとんどなかった。そのため、これから執筆していく予定の箇所について先生に助言を求めた。具体的には、イントロダクションから研究手法のセクションへの橋渡しとなる箇所である。

今のところの構成案では、イントロダクションの後に、まずは成人教育に対してダイナミックシステムアプローチを活用している先行研究について言及する予定である。その中で、ダイナミックシステムアプローチを適用することが、なぜ成人教育の研究で有益なのかを説明したい。それを受けて、今回の研究の核となるいくつかの概念と理論を説明しようと思う。具体的には、成人学習のプロセスにおいて不可避な現象である「変動性」について言及し、今回の研究における主たる定量化手法であるカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論について説明するつもりである。

それらの説明を受けて、現在の成人教育の研究では何が盲点となっているのかを指摘し、まだ研究がそれほど進んでいない観点について言及したい。そうした説明を行ってから、仮説とリサーチクエスチョンを展開する予定である。

今回の私の研究は、理論的な側面とデータ解析の側面が半々ぐらいであるため、仮説とリサーチクエスチョンのところまでで、おおよそ8-10ページぐらいの分量を目安に執筆すると良い、とクネン先生から助言を得た。その後、今回の研究の山場となる、フィッシャーのスキル理論を用いた定量化の話題に移った。実は、年末の一時帰国の最中も、この点について少々懸念をしていた。というのも、フィッシャーのスキル理論に習熟していなければ、発話構造をスキルレベルの観点から分析していくことは非常に難しいと思っていたからだ。

確かに、私も未だに分析の判断に悩むことがあるが、ここで述べている難しさとは、他の測定者に関するものである。つまり、測定者間信頼性を確保するために、本来他の研究者に同じように分析をしてもらうのだが、こちらがいくら精緻な分析マニュアルを作成したとしても、彼らに対して私がトレーニングを施し、分析の観点と方法を教え込む必要があるのだ。この作業には多くの時間がかかってしまい、今回の修士論文でそこまで行えるほどの時間的余裕はない、とクネン先生から指摘を受けた。

クネン先生からの代替案として、この修士論文をもとにした査読付き論文を今後執筆する際に、測定者間信頼性を測定することにし、今回はできるだけ精緻な分析マニュアルを作成し、それを活用して私自身の測定者内信頼性を測定するのはどうか、というアイデアを得た。つまり、作成した分析マニュアルをもとに、私自身がいったん全てのデータセットに対してスコアリングをし、その結果を伏せた後に、無作為でそこからデータを複数個抽出して再度スコアリングを行い、その一致度を確かめるということである。その一致度を測る係数のことをカッパ係数と呼ぶ。

次回のミーティングまでにカッパ係数の測定をし、上記で言及した箇所を中心に論文の文章を書き進めていきたい。2017/1/16

今朝は起床直後、夢の中の意識と覚醒後の意識の狭間に少々漂っていたように思う。この意識状態は大変不思議なものであり、思いがけないアイデアが湧き上がってきたり、覚醒中の意識では見ることのできないビジョンが脳内で知覚されることがよくある。

今日も何かしらの思いがけないアイデアが表出していたのであるが、とにかくそれらを書き留めておくことをしなかったために、それらはどこかに飛び去ってしまった。今この瞬間の内側に感触として残っているのは、ある二つのテーマに対する自分の確信であった。命題の内容すらも忘れてしまっているのだが、ある二つのテーマについて思考が働いていたのは覚えており、それらのテーマに対して確信を持った回答が湧き上がっていたことだけは覚えている。それらが何であったかは、いずれ覚醒意識の中で思い出すであろう。

そして、ビジョンに関しては何の変哲も無いものであった。夢見と覚醒の狭間に位置する意識状態の中で、私はよく専門書や論文を読んでいる。今日も、自分の脳内である論文が鮮明に想起され、それを読んでいた。いずれの体験にせよ、脳と意識が持つ不思議な特性が生み出したものであることに変わりはないだろう。

早朝起きてみて気づいたが、フローニンゲンに戻ってきてから新しい食生活にしたことが功を奏してか、肌の調子がとてもいい。食生活に変更を加えたのは、サラダにかけるオイルを三種類の有機オイルに変えたこととニシンの酢漬けを毎日食べるようにしたことぐらいなのだが、その効果は大きいように思う。自分の各種の臓器を観察してみると、特に腸の調子がとてもいいことに気づく。この食生活は是非とも継続させていきたいと思う。

一方、フローニンゲンに戻ってきてから、オランダ語のテキストがなかなか進まない状態が続いていた。確かに、フローニンゲンに戻ってきてからも毎朝オランダ語の音読をしているのだが、それは過去に学習した箇所ばかりであり、新しいチャプターになかなか進んで行く気力がなかったのだ。今日から心機一転、新しいチャプターに入り、再びオランダ語学習を少しずつ前に進めるようにした。これらがフローニンゲンに戻ってきてからの近況である。

それにしても、昨日のクネン先生とのミーティングは、とても意義深いものであったと改めて思う。先生からの何気ない一つの助言により、視界が一挙に開けた感じがしたのである。やはりアドバイザーがいるのといないのとでは、研究の進捗と深度に大きな差が出ると思った。こうした優れた支援者の存在は、スキャフォールディング効果を生み出し、私の最近接発達領域をさらに押し広げ、自分の機能レベルを向上させてくれることにつながるのだと実感している。

他者との対話が何らかの突破口を開きうるという事実を目の当たりにしたような体験であった。昨日のクネン先生からのフィードバックを受けて、今日も研究を少し前に進めておきたい。同時に今日は、第二弾の書籍の原稿に加筆修正を行いたいと思う。今日も静寂さの世界の中で、着実に自分の探究と仕事を進めていくことになるだろう。2017/1/17

663. 既踏の道と未踏の道

辺りは一面雪景色のままであるが、今日は今朝から天候に恵まれている。起床直後はいつも闇に包まれているため、朝の九時近くになるまで今日が良い天気なのかを肉眼で確認することはできない。辺りが少しずつ明るくなってきた頃、今日は天候に恵まれた日であると始めて知る。そうした気づきを得た後、午前中は第二弾の書籍の加筆修正を行っていた。加筆修正を行ってみると、文書を寝かせて正解であったことに改めて気付く。

文書をしばらくの間寝かせることは、私自身の内面をさらに熟成させることと同義であり、内面が少し深まった状態で改めて文章を読み返すと、色々なことに気付く。確かに、それらの多くは、論理的なつながりであったり、言葉の選択であったりと細かな点である。しかし、それ以上に重要なのは、しばしば一段深掘りされた考えが文章に付加されることがある、ということだ。午前中は文章を読み返しながら、細かな修正を加え、一段深掘りされた考えを文章に付け加えていくということを行っていた。

加筆修正がひと段落ついたところで、ランニングに出かけることを決意した。書斎の窓からストリートの状況を確認してみたところ、歩道は雪で埋もれているが、自転車道は雪が積もっていないことを発見した。そのため、近くのサイクリングロードを走ることにした。黄金色に優しく輝く冬の太陽を背にし、私は一步一步の足取りを確認するかのように走っていた。すると突如、自分はフローニンゲンという街に捕まったのではないか、という感覚に襲われた。

ただし、これはそれほど強い束縛感ではなく、この街にもう少し留まっていたほうが良いという柔らかな感覚であった。私がフローニンゲンにやってきた頃の計画では、この街で二年間ほど生活をする予定であった。しかし、この突発的な感覚に見舞われた時、さらにもう一年滞在期間を延ばし、三年ほどフローニンゲンの街にいたことが望ましいのではないかと思ったのだ。そうした思いにさせたのは、おそらく、フローニンゲン大学での学びの密度が非常に濃いことと関係しているだろう。

正直なところ、自分が想像していた以上に密な学びが得られているという実感がある。同時に、二年間という期間ではフローニンゲン大学で学び取るべきことを、その髓まで学び取ることができないのではないか、という思いが無意識の領域から顔を出したのだ。実際に私は、フローニンゲン大学での二年目の学びに関して、二つのプログラムの間で揺れていた。どちらも私にとって非常に重要なものであり、どちらも捨て難いという思いが強かった。こうした学びに伴う衝動的な感情は抑えようがない。

仮にこうした感情に純粋に従うならば、私はこの街に三年間いることになるだろう。そのようなことを思いながら、サイクリングロードを走り続けていた。いつもあれば、サイクリングロードを途中で曲がり、ザーニクキャンパスの方向に抜けていくのであるが、今日はそれをしなかった。というのも、サイクリングロードを走る最中に背中越しに降り注いでいた太陽光の存在がずっと気にかかっており、来た道を折り返すことで、その太陽を拝みながら走りたいという思いが湧き上がっていたからである。

優しさの中に厳しさを含む冬の太陽と直面し、私は自宅に向かって再び走り出した。視線を歩道にやると、歩道の上に足跡のない箇所があるのと同時に、足跡のある箇所があることに気づいた。そこから、誰かが通った道を歩むことと誰も通ったことのない道を歩むことの尊さについて考えを巡らさずにはいられなかった。これはどちらかが大事なのではなく、どちらも尊重されるべきことだと思うのだ。

誰かが過去に通ったことのある道を辿ることによって、その道は強く太くなる。そして、強く太くなった道は、多くの人がある上を歩きやすくなる。一方、過去に誰も通ったことのない道を歩くことによって、その足取りの一步一步が、新しい道としてこの世界に誕生することになる。そして、その新たな道を自分の知らない誰かがまた辿ることになるのだろう。そのような様子がまぶたの奥に現れた時、私は、誰かが通ったことのある道をさらに強く太くするために、その上を自分の足で歩いていかなければ

ればならないと思った。そして、誰もかつて通ったことのない道を、自分は開拓していく必要があるのだと強く思わずにはいられなかった。2017/1/17

【追記】

今の率直な心境として、確かにフローニンゲン大学とこの街の生活から私はまだまだ学ぶことがたくさんあると思う。しかし今は、ここでの学びに一旦区切りを付け、再び新たな世界に向けて一歩足を踏み出す時期にあるように思う。昨夜もそのようなことを思っていたし、今朝もそのようなことを思っていた。新天地として有力なのは米国の大学院であり、そこで探究活動を新たに開始することが今の私の一番の望みである。もしその場所と何かの縁があるのであれば、私はそこに出向き、そこでこれまでにはない形と投入量で探究活動を新たに始める。フローニンゲン:2018/4/7(土) 15:21

664. 習慣的・突発的な文章執筆

昨日はほぼ一日中、第二弾の書籍の加筆修正を行っていたように思う。もちろん、早朝の早い時間帯に少しばかり学術論文に目を通したり、昼食前にランニングに出かけたりしていたが、基本的には残りの時間を執筆に充てていたように思う。そのおかげで、随分と中身の体裁が整ったように思う。昨日積み残していた章に対して、今日も加筆修正を行っていききたい。

文章を執筆している最中、そこにはいろいろなリズムがあることに気づく。特に昨日は、自分の精神状態と言葉が生み出されるリズムに着目をしていた。両者のリズムが合致するとき、私は「書く」という行為と一体になれるのだと分かり始めた。ここでも、シンクロナイズーションの重要性を知る。つまり、精神状態のリズムと言葉が生み出されるリズムの双方が同調しなければ、書くという行為と一体になることはできないということを知ったのだ。

さらに興味深いのは、二つのリズムが合致するとき、行為との一体化という一段次元の違うリズムが生み出されることだ。シンクロナイズーションにはもしかすると、何かしらの二つのリズムを同調させることにとどまらず、同調からさらに新たな別種のリズムを生み出す力があるのかもしれない、ということを使った。

書籍の加筆修正を続けていたとき、ある時点でふと、私が毎日書き残している日記の時間帯について思考が飛び移っていた。これまでは、特にどの時間帯に日記を書くということを決めておらず、

気の向いたときに筆を走らせていた。だが、よくよく自分が日記を書く時間帯を思い返してみると、朝と夕方あたりに多いことに気づいた。ここから、日記を書く時間帯をある程度設定し、文章を書く習慣をより強固にしてもいいのではないかと思った。

文章というのは、毎日書いていないと錆び付いてしまうようなものだとつくづく思う。より厳密には、文章を毎日書いていないと、自分の内側から言葉を紡ぎ出す装置に淀みが生じる感覚がするのである。あるいは、言葉を紡ぎ出すエネルギー体の筋力が劣化していく感覚があるのだ。それらを防ぐためにも、そして、日々の足取りを少しでも形に残しておくためにも、私は日記を毎日書き続ける必要がある。

そこから、日記を書く時間帯に関しては、まずは起床直後の朝の習慣的实践を終えた後に、すぐさま何かしらの文章を書いておきたい。そこで書き残す文章は、主に昨日の振り返りやその日に取り組むべき探究課題や仕事に関する内容になるだろう。そして、夕方か晩にその日一日の振り返りを兼ねた文章を書き残しておきたい。そうすれば、少なくとも朝夕の二回にわたって何かしらの文章を書くという修練を積むことができる。

こうした習慣が定着すれば、自分の在り方や生き方を含め、内面世界の成熟にも確かな変化が起こるだろう。そして、文章を書く際に重要なのは、時に抑えがたい執筆衝動に根ざして言葉を紡ぎ出していくことだ。朝夕に何らかの文章を執筆することは、習慣的实践であり、修練の要素が多分にあるため、そこに強い言葉の力が内包されるとは限らない。往々にして、その逆のケースが見られるかもしれない。

やはり文章を書き残す際に大事にしたいのは、それを表現しなければならない明確な理由であり、表現することを内側から強く促す感情や感覚の存在である。文章として書き残しておきたいことは、一日のどの時間帯にやってくるかは不明であり、非常に突発的に目の前に現れるものなのだ。そのため、衝動的に文章として書き留めておきたい思念が沸いたら、その都度メモの形でも良いので何らかの文章を書き残しておくことが大事になるだろう。

今日から、朝夕の二回は必ず文章を執筆することを習慣とし、あとは自分の身に降りかかる突発的な衝動に従って文書を書き残すことを継続させていきたいと思う。2017/1/18

【追記】

この日記で書かれていることは見事に私の日々の習慣となった。実際には、朝夕の二回の時間帯において、だいたい各々二つほどの記事を日記として書き留めておくようになった。また、上記の文章の中で言及しているように、文章を書き残しておきたいという衝動的な力が内側に生まれた場合には、一日日に五回から七回ほど日記を書くようにしている。そのような形で日々、自分が確かにこの瞬間に生きていたという存在記を書き留め続けている。フローニンゲン:2018/4/7(土) 15:29

665. オランダの歯医者にて

今日は朝一番から、第二弾の書籍の加筆修正を行っていた。幸いにも、集中した意識の中、この作業に取り組むことができたように思う。以前言及したように、文章を寝かせることはとても大切なことだと思った。文章を寝かせてみて、再度自分が書いた文章に目を向けると、論理展開の不備という表面上の問題のみならず、言葉の密度のばらつきという、私にとってより大きな問題に気づくことができる。

今日は朝から、言葉の密度が弱いところを補強するように、新しい言葉を付加させていくことを行っていた。この作業は、昼食後をもってして、とりあえず無事に完成したと言える。図表の作成も終わっているのも、これから取り組みたいことは、三種類の見出しのうち、最小単位である小見出しを自分なりに設定していくことだろう。前回の著作では、中見出しと小見出しを全て編集者の方に付けてもらっていた。しかし、今回は編集者の方から事前に助言を得ていたのも、自分なりに小見出しを付けておきたいと思う。

そして今日は、五年間の外国生活の中で初めての経験をした。それは歯医者に行ったことである。振り返ってみると、今から六年前の渡米直前に、当時住んでいた大阪で歯医者に行ったきりになっていた。その時の光景が蘇る。当時、歯のメンテナンスを兼ねて毎年一回は歯医者に行くように、という忠告を担当の歯科医から受けていたことを今になって思い出す。

アメリカに渡ってからは、歯医者に行く余裕があまりなく、そもそも日本人以外の人間に自分の歯を治療してもらうことに対して、当時は幾分抵抗感があつた。しかし今回はそのようなことを言ってい

れない事態に見舞われた。今から数日前、日本からオランダに戻ってきて、突然、左右の上の奥歯が痛み始めたのだ。何もしていない時に痛むのではなく、食べ物を噛む時に痛みが走るのである。

この痛みを感じるのが嫌であったため、いっその事、食事を抜きたい時すらあった。最初は疲れからくる歯の痛みだと思っていたが、身体の疲労が歯に影響を与えるというのもあまり納得のいく説明ではなかったため、すぐさま近くの歯医者に見てもらうことにしたのだ。歯の異変を感じてからすぐに予約を済ませたので、痛みが悪化する前に診断を受けることができたのは有り難かった。その歯医者は、これまでオランダ語の学習のために足を運んでいた大学キャンパスのすぐ近くにある。

そして、この歯医者の中科医は全員、フローニンゲン大学の歯学部を卒業していることがウェブサイトからわかったので、どこことなく親近感と信頼感があつた。実際に歯医者に着いてみると、非常に適切な対応をしてくれた。私は中科医ではないため、歯に関する英語の語彙は豊富ではないのだが、担当医の話を不自由なくすべて理解することができた。担当医の説明の最中、“wisdom tooth”という単語が出てきたが、それもすぐさま「親知らず」のことだと文脈から容易に推測することができた。

結局、来週の金曜日に、左右の上の親知らずを合計二本抜き、親知らずの横にできた虫歯を治療することになった。「親知らずを抜く」ということを聞いた時、すかさず担当医に、「先生、親知らずを抜くのはとても痛いと聞きました・・・」と子供のような発言を私はした。すると担当医は、「はは、大丈夫です(笑)。痛くないように麻酔をかけますから」と述べ、私を優しくたしなめた。麻酔をかけてもらえると聞いても、やはり不安感が残る。

目安の治療時間は30分とのことであるが、虫歯の治療から親知らずを二本抜く作業をわずか30分でできるのだろうか？ 雑な治療によって、親知らずを痛く抜かれないだろうか？ という懸念が頭をよぎっていた。また、歯というのは垂直方向に生えるのが通常であるが、私が持っている下の左右の親知らずは、なんと水平方向に生えており、歯茎の下に未だ隠れたままになっているそうだ。

今のところ、それらの歯は問題を引き起こしていないが、それらを抜くためには特殊な「手術」が必要になり、普通の歯医者では治療が不可能であるという説明を受けた。まさにとどめの一撃である。

とりあえず、親知らずを抜くことと虫歯を治療することで合意したが、上記のような懸念を心の奥底で抱えながら、私は歯医者を後にした。歯医者を後にし、自宅へ帰る道すがら、しばらく自分の歯のことについて考えていた。今後どの国で生活することになったとしても、毎年一回は歯の検診に行こうと固く誓った。

そこから同時に、いくら健康に気を使っていたとしても、自分の気づかないところで、何らかの問題が堆積している可能性があるということにも考えが及んだ。特に、身体の内側の諸々の器官についてである。六年前に企業人であることを止めたことに伴い、定期的な健康診断を自らの意思で行っていかなければならないことに改めて自覚的になった。そのようなことを考えながらとぼとぼ歩いていると、フローニンゲンの街の上空にある雲が、赤紫色の夕日に照らされて、美しいホログラムのように見えた。私はしばらくぼんやりと、赤紫色に輝く雲海を眺めていた。歯の痛みや問題も含めて、それら全てが生きていることの実感の証だと思った。2017/1/18

【追記】

その後、かかりつけの歯科医の助言に従い、一年に一回ではなく、半年に一度歯科医に検診してもらうことになった。日記を執筆するのはミクロな習慣であり、歯医者に通うのはメソな習慣である。フローニンゲン:2018/4/7(土)15:35

666. 発達理論の普及に伴う護身のための知識

昨日、ようやく米国のアマゾンに注文をしていた専門書が届いた。数年前に購入していた“A Dynamic Systems Approach to the Development of Cognition and Action (1994)”という専門書に感化されるものがあり、同じ著者が執筆した今回の書籍“A Dynamic Systems Approach to Development: Applications (1993)”を購入したいと思っていたのである。

両者の書籍はともに、ダイナミックシステムアプローチを幼児の身体運動の発達に適用した第一人者エスター・セレンとリンダ・スミスが執筆している。タイトルからも分かるように、どちらもともにダイナミックシステムアプローチを扱った専門書である。タイトルが似たようなものであるため、実は数ヶ月前にトラブルがあった。後者の書籍を注文したにもかかわらず、前者の書籍が自宅に届いたのである。

年末年始の一時帰国中に、UPSが何度も今回の書籍を宅配しようとしてくれていたそうなのだが、私が不在であったため、かなり迷惑をかけることになってしまった。昨日無事に本書を受けることができ、これから読み進めていくことが非常に楽しみである。そもそも、この書籍を購入した意図は、私が敬愛するフローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートが論文を本書に寄稿しており、その論文を読みたかったためである。また、本書の中にはその他にも優れた論文がいくつも掲載されていたからである。

確かに、大学のオンラインジャーナルを活用すれば本書のPDFを入手することが可能であり、プリントアウトすることもできるのだが、どうしても一つの書物の形でそれらの論文を読みたいと思ったのだ。昨日、歯医者の待合室でずっと本書を眺めていると、非常に興味深い発達現象に関する記載や見慣れぬ概念や理論が掲載されており、それらと今後じっくりと向き合うことを楽しみにしている。

これは当然と言えば当然なのだろうが、新しく手に入れた書籍に限らず、これまで読んだことのある書籍の中には、常に自分にとって新しい発見や気づきがある。つまり、いかなる書物の中にも、常に今の私が持ちえていない知識が梱包されていることに気づくのだ。私が毎日行っている作業は、そうした梱包を紐解き、新たな知識を獲得し、それを自分の内側で体系化していくということなのだろう。そこから一つ思ったことがある。

知識が拡張すればするほど、確かに盲点などが生まれてくることもあるかもしれないが、基本的には、世界に対する新たな観点が拡張し、これまで見えなかったことが一層見えてくるように思う。別の見方をしてみると、知識の拡張は、護身的な役割を果たすのではないかと思ったのだ。この点と最初の点には若干の飛躍があるが、知識が持つ護身性に考えを巡らせた背景は、発達理論が近年日本で普及しつつあることと関係している。

発達理論を探究する研究者として、そして、その知見を実社会に適用する実務家として、発達理論が日本で普及し始めていることは歓迎すべきことである。しかし、手放しに歓迎できないのは、現在日本で紹介されている発達理論は、非常に限定的なものであり、それらが抱えている限界を補完するような他の発達理論に目が向けられていないことにある。

つまり、多くの人にとって、現在日本で紹介されているロバート・キーガン、スザンヌ・クックグロイター、ビル・トーバートの理論が発達理論の全てであるかのような錯覚を持っており、他の理論を積極的に学ぼうとするような意識が見られないのは、非常に残念なことであり、危惧すべきことである。なぜなら、いかなる理論と同様に、それらの理論は固有の限界を抱えているにもかかわらず、他の発達理論を学習しないことによって、それらの限界に対して盲目的な状態が続き、そうした盲目性から浅薄な実践やサービスが世に出回ることを招くような気がしているからである。

現在、日本で普及し始めている発達理論の知識は、発達理論を包摂する知性発達科学という領域が持つ知識のうち、雀の涙ほどであることを肝に銘じておく必要があるように思う。危惧されるべきことは、そうした限定的な知識をもとに、それらの限界に盲目的な実践者やサービス提供者が、発達理論をもとにした浅薄なものを世の中に提供することである。こうした状況に備えて、護身的な意味を含めて、現在普及し始めている発達理論を超えて、人間の成長や発達について私たちは学び続ける必要があるように思うのだ。現在執筆中の第二弾の書籍は、護身のための知識獲得に資するようなものにしたい。2017/1/19

667. Convergent Cross-Mappingについての備忘録

今日は、「複雑性と人間発達」のコースにおける最後のクラスが行われた。振り返ってみると、このコースは私にとって非常に意味のあるものであり、ダイナミックシステムアプローチに関する理論と研究手法に関して多くのことを教えてくれた。このコースのおかげで、ダイナミックシステムアプローチを活用する研究者として、さらには、実務家としての知識とスキルを向上させることができたように思う。今日の前半部分のクラスは、前回に引き続きゲストレクチャーであるバート・トーネンが担当した。

現在、バートは博士課程に在籍しており、非線形ダイナミクスの手法に造詣が深い。前回のクラスでも、非線形ダイナミクスの興味深い研究手法をいくつか紹介してくれたため、今回のレクチャーもとても楽しみにしていた。結論から述べると、今日のレクチャーも期待を裏切らないものであり、レクチャーの主なテーマは、非線形ダイナミクスの手法を活用したシミュレーション予測に関するものだった。とりわけ、convergent cross-mapping (CCM:邦訳不明)という手法は、私の関心を強く引いた。

バートが言及していたように、CCMという手法は若干難解なものであり、私も今回のレクチャーだけで完全にこの手法を理解したわけではないが、その本質は、複数の非線形時系列データの間に存在する因果関係を把握することにある。往々にして、人間の成長・発達を研究する際に得られる時系列データは、複雑かつ非線形なものである。それゆえに、そうした時系列データの因果関係を推測することはとても困難だ。

しかし、そうした推測を可能にしてくれるのが、CCMなのだということを今回のレクチャーで理解した。例えば、ロバート・キーガンが提唱した仮説の中に、「意識の発達には、適度な葛藤と適切な支援が必要である」というものがある。この仮説の中で明示されている主要な変数は三つあり、それらはそれぞれ、発達段階、葛藤量、支援量である。人間の成長・発達が非常に複雑である所以は、それら三つの変数が相互に影響を与え合っているところにあるだろう。

単純に葛藤量が発達段階に影響を与えるのでもなく、単純に支援量が発達段階に影響を与えるわけではないのだ。つまり、葛藤量や支援量は発達段階に影響を与えながらも、発達段階の高度化が葛藤量や支援量に影響を与えることが考えられるのだ。さらには、葛藤量と支援量も、どちらかが一方に影響を与えているのではなく、双方で影響を与え合っていると考えの方が自然である。一般的に、既存の統計学の手法では、複数の非線形時系列データがお互いに影響を与え合っている場合、それらの因果関係を推測することは難しい。

しかし、仮にそれらの変数をうまく定量化し、なおかつ時系列データが適切に得られた際に、CCMが力を発揮するのだ。幸いにも、現在の私の研究では、非線形時系列データがすでにいくつか得られているため、今後の研究でCCMを是非とも活用してみたいと思う。複雑な振る舞いを見せる現象を研究する際に、CCMの応用範囲はとても広いように思う。今日のクラスが終わり、早速バートの論文“Using state space methods to reveal dynamical associations between cortisol and depression (2016)”をプリントアウトした。この論文を読むことによって、CCMに関する理解をさらに深めたいと思う。2017/1/19

本日、「複雑性と人間発達」のクラスに参加するために、キャンパスに向かっている最中、近くの運河が凍っていることに気づいた。論文アドバイザーのクネン先生から話に聞いていたように、冬になるとフローニンゲンの運河は凍結し、その上をスケートできるということだった。実際に、近所の運河が凍っているのを発見した時、一人の男の子が凍った運河に恐る恐る足をつけていた。どうやらまだ完全に凍っていなかったようであり、スケートができる日はもう少し先のようだ。

運河が完全に凍結するのはまだであるが、街の歩道の多くには雪が降り積もっており、時折、滑りやすい箇所がある。今日も何度か滑りかけ、少しバランスを崩すようなことが何度かあった。そのたびに、少しばかり笑みが自然と漏れた。実際に、道行く子供たちの幾人かは、あたかもスケートを滑るように、滑りやすい箇所を楽しそうに進んでいる光景を見かけた。

キャンパスに向かう最中にいつも通り抜けるノーダープラントソン公園では、散歩に連れられた犬たちが、リードを外され、楽しそうに雪の積もった芝生の上を駆け回っていた。フローニンゲンの冬は、寒さが厳しく、日照時間が短いという、一見すると否定的に思える気候条件の中に、冬ならではの喜びや楽しさが隠れていることに気づいた。ここに私は、夏とは違う陽気さを冬の中に見いだすことができる。公園を通り抜ける私の足取りはとても軽く、一面が雪化粧で包まれた辺りの中を、心躍るような気分によって頬が紅潮するかのような感覚で歩いていたのだった。

このように、冬という季節が持つ明るい側面に気づかせてくれたのは、フローニンゲンの冬が初めてだと言えるかもしれない。それともう一つ、フローニンゲンの冬が私にもたらしてくれたことがある。それは、平穏な心境の中で衝迫的に探究活動に従事できるようになったことである。これは私にとって、とても大きなことだと言える。

欧州に渡る前後の私は、何かに取り憑かれたような状態で衝迫的に探究を進めていたように思う。それはまるで、正常さと異常さの境界線上を歩いているような状態であった。この境界線上を歩くことによってしか得られぬものがあることは確かだろうが、その状態は、正常さに転ぶのか異常さに転ぶのか、という危険性が常に内包されていたように思うのだ。さらにこの状態には、どこか当時の自

分の心身の許容量を凌いでしまうようなものがあつたのも確かである。だが今の私は、この境界線上をいったん渡りきったという確かな実感がある。

これは私の心身の許容量が拡張したためにもたらされたのかもしれない。仮にそうでなかったとしても、衝迫的な探究を超えた形で現在の探究活動に従事できていることは疑いようのないことなのだ。そして、これをもたらしてくれたのは、フローニンゲンの冬だと思っている。まさにそれは、フローニンゲンの冬が私に与えてくれた恵みだと表現していいだろう。

衝迫さを通じて探究していた時の私は、ある意味、一つの大きな変化の波に乗りながら日々の活動に従事していたように思う。変化の波に乗るというのは、当時の私にとって、最初に通らなければならぬプロセスだったように思う。しかし、今の私は、もはや変化の波になど乗っていないという確信めいた感覚がある。変化の波に乗るのではなく、絶え間ない変化の波を生み出す「それ」そのものと一体化し始めているのを感じるのだ。

ここに、何かに取り憑かれたような状態で衝迫的に探究を進めることを超えて、私に取り憑こうとするものそのものと自己が一体化することにより、衝迫さを超えた次元で探究活動が形作られているように思うのだ。これが真に可能になった時、私は絶え間ない変化の中で、生涯にわたって自分の言葉を紡ぎ出していくことができるような気がするのだ。その結果として、それが何らかの作品としての形を成すのだと強く思う。2017/1/19

【追記】

今から当時を振り返ってみると、この日記で書かれていることは大変興味深い。確かに、それ以降、衝迫的に探究活動に取り組むことはなくなったように思う。自分の精神の構造が一段次の段階に至り、知識体系を構築することにせよ、思考運動を行うことにせよ、以前意識的に行っていたことが無意識的に行えるようになり、一段高度な事柄に考えを巡らせることができつつあるように思う。こうした様子を観察してみると、やはり私は変容の踊り場に差し掛かっているのだと思う。だからこそ、今年の秋からはまた新たな環境で探究活動に従事したいと思っているに違いない。一昨年まで保持していた精神の構造が次の段階に到達したというのは特筆することでもなんでもなく、私が新たな環境で再度衝迫的に探究を行うことへ向けた再出発の始まりを意味しているにすぎない。フローニンゲン:2018/4/7(土) 15:53

「複雑性と人間発達」の最終回のクラスの後半では、私の論文アドバイザーを務めるサスキア・クネン先生のレクチャーが行われた。主要なテーマは二つあり、一つは発達支援の効果を評価する方法であり、もう一つは「モンテカルロ法」と呼ばれる手法についてである。とりわけ、前者の発達支援の効果を評価測定することは、私が携わる実務と研究の双方から非常に重要なテーマであった。実際のところは、そもそも発達に介入することそのものに対して慎重にならなければいけないが、仮に何らかの介入を行なった場合、その効果を正確に評価測定することはとても重要なことだと思う。

発達を支援する介入方法は様々あるが、例えば、発達理論に基づいたコーチングやサイコセラピーであったり、リーダーシップ能力や問題解決能力などを向上させることを意図して作られた能力開発トレーニングなどがあるだろう。私が現在携わっている実務と関連付けると、実証ベースの発達支援コーチングや人財開発プログラムを提供する際に、やはりその効果測定を適切に行うための高度な知識と技術が要求される。特に、発達現象が非線形的かつ複雑であるという性質上、その効果を測定するのは一筋縄ではいかない。

そこから、既存の統計学の手法では限界があるということを、今日のレクチャーからも強く実感させられた。現在、金融の世界では、複雑な挙動を見せる株価を予測するために、非線形ダイナミクスの手法が積極的に活用され始めている。それと同様に、複雑な挙動を見せる人間の発達過程を予測するために、特に、介入支援後の挙動を分析することに対しても、非線形ダイナミクスの手法は非常に有効だと言えるだろう。

そもそも既存の統計学の手法にはどのような限界があるのかを少し考えてみた。例えば、ある子供が失敗に対する恐れを感じており、ソーシャルスキルに関する問題を抱え、なおかつ学業におけるパフォーマンスが低かったとする。また、統計結果から、失敗に対する恐れやソーシャルスキルの欠如と低い学業パフォーマンスが関係していることがわかっているとする。そこから、失敗に対する恐れに介入していくような計画を立案したと想定してみる。

ここで議論の的になるのは、そもそも既存の統計手法を用いた結果は、果たしてその子供にどれだけ当てはまるのか、という問題である。既存の統計手法は基本的に、集団を対象にして平均を用い

ることが多く、集団の平均を基礎にして導かれた結果が、どれだけ特定の一人の人間に該当するのかは定かではないことが多いだろう。つまり、この場合、失敗に対する恐れやソーシャルスキルの欠如と低い学業パフォーマンスが、その子供の中でどれだけ重大なものなのかがわかりにくいということだ。何らかの工夫や方法をもってして、これが既存の統計手法によって明らかになったとしても、さらにもう一つ大きな問題がある。

二つ目の議論的は、失敗に対する恐れに対する介入の条件とタイミング、そして誰から介入を受けるかの問題である。実務的には、この問題が最も重要であるように思うし、人間のダイナミックかつ複雑な特性を考慮してみても、この問題は最初の問題よりも大きな意味を持っていると思う。そして、既存の統計手法では、この問題に対する回答を与えることは基本的にはできない、ということを学んだ。つまり、既存の統計手法は、複雑な発達現象のプロセスを評価するためには適さないということである。

既存の統計手法は、ある要因と別の要因の線形的な関係を評価することには強みを発揮することができる。しかし、人間の発達現象では、ある要因が別の要因と絶えず相互作用するようなことが起こっており、それらの要因が持つ非線形的な関係を評価することには、既存の統計手法は強みを発揮することはできないのだ。

動的なシステムとしての発達現象に潜む、非線形的な要因間の関係性を評価するためには、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスが発想と手法が求められる。要約すると、介入手法の結果のみならず、介入のプロセスそのものを絶えず正確に把握することに関して、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスは強みを発揮するというのを改めて学んだ。具体的な方法については、また後日書き留めておきたいと思う。2017/1/19

670. 巨人の肩と生きた絵画

昨夜、今の自分の姿を的確に映し出すかのような夢を見た。その夢の具体的な描写をしてしまうと、説明が冗長になってしまうため、夢が表す本質的な意味を抜き出すと、一つの大きな壁を乗り越えたというものであった。その壁は前人未到の高さを誇っており、いまだかつて誰も登ったことのないものであった。その壁を何とかよじ登り、完全にその壁に登りきることを象徴する夢であった。

壁を乗り越えた瞬間、そこから見渡す景色は非常に広大だったのだが、あまりの高さに幾分めまいのような現象に見舞われた。より正確には、これほどまでに高い壁を乗り越えたことはなかったため、そこからの景色の高さに少し不安感がよぎっていたのだ。

しかしながら、その不安を払拭させてくれたのは、壁をよじ登る際に足を支えてくれていた他者の存在であった。文字通り、私は他者の肩を借りることによって、その壁をよじ登ることができたのだ。夢の中の「他者」は友人だったのだが、私には、そのシンボルは「全ての先人」を表しているように思えて仕方なかった。「巨人の肩の上に立つ」という言葉にあるように、今の私は探究活動の際に、過去の先人たちの力を大いに借りているという意識が強くある。

まさに、彼らが残した業績の上に自分の探究活動があり、自分の探究活動は、彼らの業績の上にさらに新たなものを積み重ねていくことだという自覚があるのだ。そうした自覚と共に、日本への一時帰国を経て、自分がまた違う場所に辿り着いたという確かな感覚が昨夜の夢を生み出したのかもしれない。

そろそろ欧州で生活を始めて六ヶ月となり、それらの期間に自分の内側に堆積されていたものが、徐々に新たな一つの形になっていくのがわかる。その進行は緩やかに、しかし、絶えず行われていたものなのだと改めて知る。一つの大きな壁を登ったというのは、これまでの知識や経験が一つの総体として形を成したことを暗示していたのだろう。人間の発達は永遠に継続されるものであるがゆえに、壁を乗り越えた今の私には、また新しく、そしてより大きな壁が静かに自分の目の前にたたずんでいることを知る。

巨人の肩の上に立ちながら、再びこの新たな壁をよじ登ることに向かっていきたいと思う。昨夜の夢を回想し、私は書斎に置いている本棚近くのソファに深く腰掛けた。そして、そこから窓を眺めた時、窓を通じて見える景色が生きた絵画だということに気づいた。これは初めての気づきであり、なぜこれまでの自分が窓を窓としてしか見ていなかったのか不思議でならない。

縦90cm横150cmほどの長方形の窓枠が額縁となり、キャンバスに描かれている絵画とは、窓越しから見える刻一刻と変化する景色に他ならない。私は毎日、常に窓越しから見えるこの生きた絵画作品を鑑賞しながら探究活動を進めていたのだ。この生きた絵画は、一日の時間帯に見せる色合い

が時間帯によって異なる。朝の闇から始まり、日の出、日中、夕方、そして夜の闇へと彩りを変えていく。

さらには、季節ごとの表情も異なれば、通り過ぎる飛行機雲や空を舞う鳥たちも、この絵に様々な表情を与えてくれるのだ。仕事の手を止め、顔を上げると、常にこの窓枠から見える生きた絵画が視界に入る。この景色は、片時も自分と離れることはなかったのだ。そのようなことを思うとき、窓から見える景色も巨人に他ならず、自分を大いに励まし、そして常に支えてくれる存在なのだと強く実感する。2017/1/20

【追記】

「巨人の肩の上に立つ」という言葉を目にした時、改めていろいろなことを考えさせられた。特に日々の作曲実践において、私はどれだけ過去の偉大な作曲家の仕事から支援と恩恵を受けていることか。毎日作曲実践をする中で、彼らが生み出した楽曲は私に多大なスキャフォールディングを与えてくれる。彼らの作品に範を求めることによって曲を作り、曲を作る過程の中に無上の喜びと充実感を見出す。作曲を始めてからの日々の充実感と幸福感は、彼らの存在を抜きにしては語れない。そして私は、常に彼らへの感謝の念を持ち続けている必要があるだろうということに再度自覚的になる。

四月の最初の土曜日も夕方の時刻となった。これから一週間分のカレーを作る。今、書斎の窓から外の景色を眺めると、上記の日記で言及があるように、その光景は生きた絵画として顕現している。世界も私も絶え間なく小さく動き続けている。そして、この世界全体はそうした小さな動きを超越した縁起として存在しているのだと知る。フローニンゲン:2018/4/7(土) 16:06

671. 九月から

今日は昼食前から午後にかけて、今学期に履修していた「複雑性と人間発達」というコースの振り返りを行っていた。昨日の最終回のクラスの後半は、私の論文アドバイザーのサスキア・クネン先生が担当してくださり、「モンテカルロ法」と「リサンプリング(再標本化)」という二つの手法に関する理論的な側面を学び、実際のデータを使いながら実習を行った。特にモンテカルロ法は、ダイナミックシステムアプローチを活用したシミュレーションをする際に効力を発揮する。なぜなら、基本的に、人

間の発達現象に関する研究を行う際に、得られる時系列データは少数であり、それらのデータは往々にして正規分布を示さないからだ。

モンテカルロ法を活用すれば、そのように正規分布を示さないデータに対しても仮説検定ができる。このモンテカルロ法に関して、お決まりのように、博士課程に所属するドイツ人の友人であるヤニックと共に実習をこなした。ヤニックは、ダイナミックネットワーク理論に関する知識のみならず、統計学に関する知識も豊富なので、実習中に統計的な論点になった際は、いつも手助けをしてもらっている。昨日も、統計学に関して抜け漏れている自分の知識を補完してくれるかのような説明をヤニックは何度かしてくれた。

それによって、今回のモンテカルロ法に関する理解がより深いものになったことを感じる。このモンテカルロ法は、上記の特徴を踏まえると、私の現在の研究に対しても大きな力を発揮しうることが明らかとなった。実際に、以前クネン先生とミーティングを行った際に、この手法の適用可能性について考えることを勧められていた。あとは、自分の中でどのような仮説を検定したいのかを明確にすることさえ行えば、技術的なことに関しては今回の実習で十分に学ぶことができたので、この手法を早速自分の研究の中で活用することができるように思う。

クラス終了後、ヤニックと少しばかり雑談をしていた。私が今年の九月からの進路に関して、産業組織心理学か実証教育学のプログラムに進むことを考えていると伝えると、前者に関しては同じ心理学のプログラムに分類されるため、もしかしたら進学が無理かもしれない、という指摘を受けた。

産業組織心理学科は、比較的自由に選択科目を履修することができるため、ネットワーク科学に関する二つのコースを是非とも履修したいと考えていた。もし仮にこのプログラムに進むことができなかった場合には、当初の計画通り、実証的教育学のプログラムに進み、履修単位を超える形でネットワーク科学に関するコースを最低一つは履修したいと思う。実証的教育学のプログラムに関しては、プログラム長に先日メールをし、自分の関心領域の研究と探究ができるのかを現在確認中である。今年の九月からもう一年ほどフローニンゲン大学に残って研究を是非とも続けたいと思っているのだが、その後、米国に戻るのか、フローニンゲンにとどまるのか、あるいは他の国に行くのかはまだ定かではない。

昨日の振り返りを行っていると、すっかり辺りは夕方の雰囲気にも包まれていた。書斎の窓から、夕日によって赤紫色に輝く雲海が見える。相変わらず、赤紫色に輝く雲はとても美しい。このような美を拝めることに對して、とても贅沢な気持ちになった。それと同時に、この美を独り占めするのではなく、多くの人と共有したいという強い想いが湧き上がっていた。美の創出と共有を真に実現させるためには、まだまだやらなければならないことが私の中には沢山ある。2017/1/20

672. 遅く起きた週末と物語

昨日に大量の文章を長時間にわたって音読していたせいだろうか、昨夜の睡眠は脳を回復させるのに時間がかかったようである。目覚めてみると、朝の七時半を過ぎており、いつもよりだいぶ遅い起床時間となった。目覚まし時計で起きることを避けるようになってから、十年以上の月日が経つ。目覚まし時計を使わないようにしているのは、自分の身体のリズムに合わせて、必要な分の睡眠時間を適切に取り、無理に覚醒させられることを避けるためである。

昨夜も九時半から就寝準備を始め、十時には眠りについていてことを考えると、昨夜は随分と眠っていたことがわかる。確かに、昨日大量の文章を音読している最中にふと思ったのは、これは脳を最大限に駆動させ、これを長く続けていれば、脳は随分と鍛えられるだろう、ということだった。ただし、昨日は少々脳を酷使しすぎたようであり、そのために睡眠時間が長くなったのだと思う。少しばかり遅く起きた週末の朝、いつもと変わらぬ朝の習慣的な実践を行い、以前書いた自分の文章に目を通していった。

一つか二つほど以前書いた日記を読み返し、それに加筆修正を加えるということも私の毎朝の習慣となっている。今日はある文章を読みながら、それを書いたのは本当に自分なのだろうか、という思いが湧いてきた。細かな内容や文章の構造というよりも、全体として眺めてみたときに、その記事を書いたのは自分ではない気がしていたのである。しかし、よくよく考えてみると、それもそのはずだと思った。

過去の文章を読んでいる今の自分は、もはや過去の自分ではないのである。自分の内側の変化に絶えず意識を払い、それを逃さず観察していることを続けていけば、過去の自分と今の自分との間に見過ごすことのできない変化の証が存在していることに気づく。先ほど読み返していたのは、何

の変哲も無い話題について書かれた日記であったが、今の私にとって、自分の変化の痕跡を辿るためには、そうした日記は非常に貴重な資料だと思った。

今日は土曜日であるため、週末特有の時間感覚が流れていることがわかる。そうした時間感覚に包まれながら、ゆっくりと探究活動と仕事を進めようと思う。自分の内側のリズムを掴み、そのリズムと探究活動が真に合致するとき、一般的な意味での休息など必要ないことがわかる。自分にとっての最大の休息は、内側のリズムと探究活動のリズムが合致した際に生み出される新たなリズムの中に溶け込むことである。それが何よりも心地よく、それが最大の休息として私を落ち着かせるのである。こうしたことが、日々の生活の中でほぼ完全に実現できつつあることは喜ばしい。

今日は午前中に、第二弾の書籍の原稿を再度読み返し、いよいよ月曜日に完成原稿として出版社に送るつもりである。午後からは、自分の研究を少しばかり前に進めたいと思う。具体的には、一つの大きなデータセットを、カート・フィッシャーのレベル尺度を用いて分析しておきたい。それが終われば、自分が構築したコーディングシステムを評価することができ、これに関する文章を研究論文の中で執筆していくことができる。

毎日毎日が、一つの大きなリズムの中から生み出されていることを強く実感する。そのリズムが生き物のように変化に富むためだろうか、毎日書き記す日記の連なりが、一つの大きな物語になっていくかのようだ。2017/1/21

673.「複雑性と人間発達」の最終試験へ向けて

平日と変わらぬ休日が、今日も終わりを告げようとしている。平日と同様のリズムで一日を形作り、自分が成すべきことを着実に前に進めていくという、いつもと同様の一日だったように思う。夕食を食べ終わり、一息つきながら本日の振り返りを少し行っていた。夕食を食べる前に気づいたのは、季節が少しずつ確実に春に近づいている、ということであった。

食卓のテーブルから窓越しに外を眺めると、日が沈む時間が延びていることに気づいた。気づかないうちに、完全に日が沈むのが、夕方の六時ぐらいになっているのである。太陽が沈む時間が延びていることに気づき、同時に、ストリートの雪も溶けていることに気づいた。おそらく、一月末や二月にかけてはまた雪が降るであろうから、ストリートの雪が溶けていることは一時的な現象だろう。

しかし、日の入り時間が延びていることは、春の確かな到来を予感させるものである。外側の新たな季節と内側の新たな季節に向けて、自分ができる限りの準備をしたいと思う。今の私にできることはそれしかない。

今日は結局、最後に残された研究データを分析することができなかった。その代わりに、「複雑性と人間発達」のコースについて、最初の回から順を追って復習を行っていた。というのも、このコースに関する最終試験が二週間後に控えているからだ。前回、「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの最終試験では、時間に追われる形で納得のいかぬまま試験を終えることになったが、今回はその時の経験を活かしたいと思う。

その時のコースは記述式の問題が六問であったのに対し、今回は記述式の問題が八問とのことである。制限時間は変わらず二時間であるため、より一層タイムマネジメントが大事になるだろう。今回のコースを担当するサスキア・クネン先生曰く、八問ともダイナミックシステムアプローチの細かなことを尋ねるものでもなく、難解な数式を書かせるようなものでもないとのことである。

その代わりに、ダイナミックシステムアプローチの本質的な考え方を押さえておくことや、代表的な手法の特徴とその使い方をしっかり押さえておくことが大事になるという情報を得た。今回のコースを通じて、どのような手法を学習したかを簡単に列挙してみると、「ロジスティック方程式モデル」「捕食者・被食者モデル」「状態空間分析」「フラクタル尺度分析」「再帰定量化解析」「リサンプリング手法」「モンテカルロ法」などが挙げられる。

このコースを通じて、その他にも幾つかの重要な手法を学習したが、代表的なものは上記で列挙したものだろう。最終試験へ向けた学習では、まずは上記の代表的な手法の特徴を押さえ、活用場面と活用方法に関して自分なりの説明ができるようになっておく必要がある。今回の最終試験では、クネン先生の主著“A Dynamic Systems Approach to Adolescent Development (2012)”の全ページと、その他にも幾つかの論文が試験範囲となっている。特に、書籍が一冊まるごと試験範囲になっているおかげで、随分とこの書籍を読み返したように思う。結果として、コースを受講する前と比較してみると、ダイナミックシステムアプローチに関する知識と技術が格段に向上したように思う。まさに、ミクロな発達が自分の内側で起こったと言えるだろう。

博士課程に在籍するドイツ人の友人であるヤニックもこのコースを履修しており、自分の知識を整理し、知識の理解度を確かめるために、この最終試験を受けるとのことであった。思い起こしてみれば、米国の大学院では、基本的に期末レポートを書かせることを要求していたため、この歳になって記述試験を受けることに対して当初は若干否定的であった。

しかしながら、前回のコースを通じて、記述試験に向けて課題図書と論文を何度も読み込み、学習した知識を整理・確認していくことは、知識の定着に非常に有益だと感じるようになっていく。今回のコースで学習したダイナミックシステムアプローチは、今後の私の研究生活でも核となる理論と手法が詰まったものであるため、最終試験の対策を通じて、その知識を確固たるものにしていきたい。

2017/1/21

674. 物語と変容

昨日、自分の中で「物語」という概念が気になっていた。それは突然、その概念に掴まれた感じであった。物語という概念が持つ意味や特徴について深く考えたわけではなく、その輪郭の上を歩くように、ただぼんやりとそれについて思いを馳せていたのだ。特に、昼食前に近所のスーパーへ向かっている最中、物語という言葉が持つ輪郭の上を私は確かに歩いていたように思う。スーパーが視界に入り、河川を架橋する橋を渡りきった時、突然、これまでの人生が一つの壮大な物語に思えた。

同時に、その物語はこれからも続くという確信を得たのだ。「物語はこれからも続く」ということの意味は、自分の人生の中だけにとどまらないことを知った。つまり、自分がこの世からいなくなっても、自分の物語は永続するということを知ってしまったのだ。これは奇妙な話でありながらも、とても腑に落ちる話だと私は思った。

これまでの私の人生で生み出された物語についてぼんやりと考え、これから紡ぎ出される物語について、しばらくぼんやりと考えていた。そして、その物語が自分の人生で完結することなく、自分の世界から解放される形で永続するという気づきに対して、とても神妙な気持ちになった。結局のところ、自分が行う仕事や探究活動の本質は、物語の永続的な創出の中にあるような気がしてならなかったのだ。このテーマは、昨日の私に少なからず影響を与えていたようだ。

今朝も昨日と同様に、起床時間が七時半であった。普段よりも睡眠時間が長い。昨夜就寝前、物語に関するテーマが様相を少し変え、この五年間と十年間の自分の足取りを振り返ることを私に否応なしに突きつけてきた。振り返ってみると、この五年間と十年間を通じて、随分と内側の変化があったように思う。それらは当時の自分では全く想像していないものであったし、当時の自分はそれらを微塵も望んでいなかった。

そこからもしかすると、真の意味での変容というのは、今の自分が望んでいる形では起こらないのではないかと思った。つまり、真の意味での変容とは、今の自分の想像をはるかに超えるものであり、それは良くも悪くも、今の自分が望むような姿とは全く違うものを私たちにもたらすのである。そのような気づきを得たためか、私はこれからの自分の変容の姿に思いを巡らせることは一切なかったのだ。ただし、私はこれからの五年、十年の間でさらに大きな変容を経験するであろう、ということを直感的に掴んでいた。

その形を求めないことが今の自分には大切であった。なぜなら、そうした形は、内側の成熟を押しとどめる不要な型となり、成熟の足取りを停滞させると思ったからである。内側の成熟は、今の自分が想定する型よりも高く深いものとして顕現するように思うのだ。成熟の歩みを阻害せず、その歩みとともにゆっくりと歩くことが何よりも重要なことだと思った。2017/1/21

675. 孤独と客死

今の私の生活を一言で表すなら、それは隠遁者の生活だと言えるかもしれない。それは山奥にひっそりと一人で生活することではなく、外界との接触を絶った生活を送ることでもない。生活態度そのものが、隠遁者のそれと同じものであり、隠遁者が抱えるであろう感情や感覚を伴って毎日を生きている、ということである。それは一見すると、孤独さの核心部分に触れる形で日々の生活を営んでいくことのように思える。

確かに、孤独さを常に抱えながら日々の生活を送っているということは、今の私にも当てはまるだろう。しかしながら、今私が抱えている孤独さは、以前自分が抱えていたものと別種のものに変容しつつある。同時に、現在の私が抱えている孤独さは、一人の個的な人間として生きることの根幹的な感情であり、それが自分の探究や仕事を力強く推し進めるものであることを知る。

極端な言い方をすれば、私はもしかすると、孤独さを感じられることができなくなった時に、自分の探究や仕事が止まってしまうのではないかとすら思う。それほどまでに、現在抱えている孤独さとは、自分にとって大切な何かであることは間違いない。

この孤独さに関しても、年末年始の日本への一時帰国を経て、その受け止め方が自分の中で大きく変わったように思う。それは孤独さに埋め込まれていた状態から、孤独さから超越した状態への変化だと簡単に表現することができるが、当人が感じている感覚は、そうした表現では語り尽くせないものとも言える。以前であれば、孤独さを引きずりながら日々の活動を推進させ、孤独さに包み込まれる中で時に狼狽することがあったように思う。

一方、現在は、孤独さを一つのある感覚の中に包み込み、その感覚を胸にしまいながら日々の活動を前進させているように思う。つまり、孤独さからの完全な脱却は不可能でありながらも、以前の孤独さを別の異なる孤独さとして抱擁しながら、歩みを進めているような感覚なのだ。より正確には、以前の孤独さが脱皮を遂げ、別種の孤独さが現れ、それは自分を狼狽させるようなものではなく、自己の本質と密接に結びついているがゆえに、想像を絶する安心感を私にもたらすようなのだ。

そのようなことを思いながら、昼食を摂っていた。昼食の最中、もう一つ、「客死」という言葉が私の脳裏をよぎっていた。客死というのは一般的に、生まれた国ではない他国で死ぬことを指す。これまでの私は、どうしても客死を避けなければならないという思いが強くあったように思う。しかし、先ほどの昼食時に感じていたのは、客死とは忌避すべきものではなく、私はそれを受け入れる必要があるのではないか、ということだった。そのように考えさせたのは、結局のところ、私は死の直前まで自分の探究と仕事を辞めたくはない、という願いにも似た強い想いであった。

重要なのは、自分の探究と仕事をより高く・深く行える場所がどこなのかということであって、それが日本なのか国外なのかは問題ではない。ただし、今現在はそうしたことを可能にする場所は国外であり、今後数十年間は日本の外にあるということがわかっている。そして、自分の探究と仕事を高められたか深められたか、という結果が重要なのではなく、そのプロセスを絶えず継続させることの中で毎日を生きることが何より重要なのだ。

その歩みを絶えず継続させることができるのであれば、それは本望であり、その最中に客死という現象が生じて、それは悔いることでは一切ないのだ、という確かな考えが自分の中から湧き上がったのである。孤独にせよ客死にせよ、それが自分の内側の進行とともに、確かに姿と形を変えていくことを私はこの目に焼き付けている。2017/1/22

676. だから日記を読み、日記を書く

—私たちが人生の空しさを超えるのは、ただ、自らを激しく燃えることによって、刻々の時間に永遠の刻印を押すしかない—辻邦生

振り返れば、今日も一日中、何かしらの文献と呼吸を共にしていたように思う。確かに、私は研究活動や仕事の都合上、専門書籍や学術論文に目を通すことが多い。そして、それらの文献に目を通すことは、自分の心を満たしてくれる非常に大切な行為であり、この行為がない日常を私は想像することができない。

ある著者の考え方や思想が、一つのまとまった形になったものが専門書や論文であるために、彼らの考え方や思想を整った形で学ぶことに関して、専門書や論文からは得るものが多くある。しかし、私が一番多くのことを得ることができると思っているのは、探究的な人間が書き残した日記である。私は、専門書や論文をできるだけ丁寧に読みたいと常々思っているが、実態はそうではない。

だが、日記だけはなぜだか丹念に読むことができるのだ。丹念に読む行為を仕向ける日記には、どこか私を引きつけてやまないものがある。私は、専門書や論文を読むこと以上に多くのことを、特定の思想家や探究者の日記から得ているように思う。

つまり、一番多くのことを私が得るのは、一つのまとまった形を持つ専門書や論文ではなく、その思想家や探究者がどのように日々を生きていたのかを色濃く映し出す日記なのだ。結局のところ、専門書や論文から得られるものは、どこまで行っても探究者の経験や実存性が硬い殻に包まれた知識であり、そうした知識は重要でありながらもそれ単独では無用の長物である。

大切なのは、硬い殻に覆われた知識の中に梱包されている経験や実存性そのものを掴むことであり、紐解かれた後の知識を日々の生活の中で活用する主体そのものの成熟だと思うのだ。そして、

そうした主体の成熟に影響を与えてくれるのは、専門書や論文というよりも、探究者の実存性が滲み出る日記なのだと思えて仕方ない。私は、その思想家や探究者が、自分の思想を通じてどのように日々を形作り、一日を積み重ねていったのかに関心があり、それに感化されるのだ。辻邦生先生や森有正先生が書き残した一連の日記に打たれるものがあるのはそのためだ。それゆえに、私は彼らの日記を丹念に読むのだろう。今日もそのような一日だった。

午前中から夕方にかけて、専門書や論文をいくつか読み、それがひと段落した時、ふと書斎の本棚に目をやると、辻邦生先生の『愛、生きる喜び』という書籍が目飛び込んできた。この書籍は厳密には日記ではないのだが、この書籍の中には、辻先生の日記からの抜粋がある。そうした日記からの抜粋に対して、感じざるをえない何かがあった。日記にはやはり、その著者の実存が立ち込めているのだ。確かに、私は言葉の力を信じ、言葉を大切にしたいと思う。

しかし、私がそうした思いに至るのは、言葉を超えたものが言葉に宿ることを知っているからだ。つまり大事なものは、形を伴った表面上の言葉ではないのだ。言葉の奥に滲み出している言葉にならないものを感じ取ることが大事であり、それは往々にして、専門書や論文の体裁では消失してしまうのである。だがそれは日記の中では消失することなく、存在の灯火を燃やし続けることができるように思うのだ。だからこそ私は、自分を感化してくれる思想家や探究者の日記を読むのだと思う。そして、だからこそ私は毎日日記を書くのだと思う。2017/1/22

677. 触れられぬもの、そして楽しむことについて

夕日が沈むのを書斎の窓から確認し、夕方の探究活動も終わりを告げたことを知る。仕事の区切りのいいところを見計らって、浴槽に浸かった。いつもこの時間は、心身を穏やかにし、くつろぎと充足感を私にもたらしてくれる。浴槽に浸かってしばらくすると、私はある概念についてだけ、未だ全く踏み込むことができていないことに気づいた。

そして、それが人間として生きる上で最も大切なテーマであると思っている自分がいたのである。それは、今の私が大切にしている「探究活動」と呼ばれるものや「仕事」と呼ばれるものを遥かに超えて大切なものだと思う。ただ、今の私には、その概念について足を踏み込んでいけるだけの器もなければ、内面の成熟もない。そして、その概念は、概念を超えて強烈な実存的体験を伴ったもので

あることに加え、人間が不可避に経験するであろう「死」とも密接に関わっているがゆえに、今の私には手に負えないものなのだと思う。このテーマに足を踏み入れることができるようになるまでの道のりは、とても長く険しいように思えて仕方ない。浴槽から上がり、再び書斎の机に向かった。

そういえば、今日は一日中、文章を読むことや書くことを行っていたにもかかわらず、それらを行っていたことに気づいていなかった自分がいることに気づいた。さらには、今日という一日を通じて、研究していることや仕事をしていることを忘れていた自分だったのである。とても不思議な日曜日である。そこからふと、以前どこかで言及した「楽しむ」という行為について考えていた。やはり、楽しむという行為は、楽しもうと思ってもたらされるものではないという気がしている。

真の楽しさは、それを求めてもたらされるのではなく、内側から否応無しに湧き上がるものだと思う。同時に、「自分はこれを楽しんでいる」と述べる時、それは真にその行為を楽しんでいるとは思えないのだ。それはまだ、楽しむという行為と一体化していないことの証拠であると思えて仕方ない。そこでは、楽しむという行為が下手に対象化されてしまっているのである。

楽しむという行為と真に一体化している人は、楽しんでいることに気づいているとは到底思えない。なぜなら、楽しんでいる自分が楽しむ行為に他ならないからである。そこからやはり、私は日々の行為を決して楽しんでなどいないのだと思う。なぜなら、私は日々の活動を楽しむ行為そのものに他ならないからである。

それが楽しむという行為が持つ全体性との一致であり、決して部分との一致ではないことの証拠だろう。私たちが部分と一致しようとする時、そこにはすかさず「対象化」や「客体化」という罠が生じる。全体との一致とは、対象化や客体化などというものが全く及ばない現象なのである。全体と一致するというのは、それとの合一化であり、それへの没入である。そこには「楽しむ」などという余裕や余地など一切入り込まないのだ。そうした余裕や余地がないほどに、自分自身が楽しむ行為に他ならないからである。

だから私は、「これを楽しみたいと思っている」「これを楽しんでいる」という発言をする人たちを信じることができないのだと思う。そうした発言の裏には、その人と楽しむという行為の間に存在している埋めがたい距離が見えるのである。こうしたことから私は、楽しむことの真の本質は、楽しむという

行為が生み出す全体との一致であり、小さな自己を超え出ていくことだと思うのだ。今日はそのようなことを考えさせてくれる一日だった。2017/1/22

678. 闇との闘いと新たな活動エネルギー

週末の土日は、いつもより少しばかり遅い起床時間になっていたが、今日からいつも通りの起床時間に戻った。早朝から爽快な気分に入れ、早く書斎の机に向かいたいという焦る気持ちを抑えながら、朝の習慣的な実践を行っていた。

書斎の机に着くと、昨夜の就寝前に、「感情の強度」というテーマが突発的に自分に降りてきたことを思い出した。いかなる話題にせよ、そこに「多くの人」や「社会」という主語が自分の頭に思い浮かぶ時、それらは私の思考によって構築されたものに過ぎない。そして、往々にして、「多くの人」や「社会」という言葉が出てくる時は、たいていそれらを否定するような話題について自分が考えていることに気づく。昨夜は、そこからさらに別のことに気づかされた。

具体的には、多くの人や社会に対して私が何か批判を加える時、それは結局、自分を否定し、自己を乗り越えようとしているのではないか、ということに気づかされたのだ。まさにそれは、個と集合の切っても切り離せない関係を象徴しており、個と集合の相互発達的な関係を示唆しているように思える。

昨夜も就寝前に、自分の思考によって作られた「多くの人」や「社会」を痛切に否定するような思念が頭の中を駆け巡っていたが、結局それは、自己の許しがたい部分を否定し、なんとか切り捨てることによって前に進もうとする意思の表れに他ならないように思えたのだ。心の闇や影に関して学びを深めてきた者にとって、自己の許しがたい部分とはシャドーと密接に関わっていることに気づくかもしれない。そして、シャドーに関する原則的な教えは、シャドーを切り離すことをせず、自己に再所有(統合)するというものだろう。

思うに、それは心の発達や治癒に関する「原則的」な教えなのであって、全てのシャドーに当てはまるものではないのではないかと考えるようになっている。つまり、シャドーを自己に受け入れるという友好的な関係を作ろうとすることだけではなく、時には徹底的に敵対的な関係を持ってして、それを撃ち破るような闘いに臨むことが重要だという気がしているのだ。

シャドーに闘いを挑むというのは幾分馬鹿げたことかもしれない。なぜなら、シャドーを撃ち破ることなど不可能であることが最初から分かっているからだ。それでも、内側の成熟を前に進める際には、時にそうした無謀な闘いに果敢に挑むような気骨さと気概が不可欠だと思うのだ。そうした思いが、昨夜の就寝前に、私の頭の中をぐるぐると駆け巡っていた、「徹底的に甘くぬるい」という批判的な言葉を生み出したように思える。

以前より、日々の私の活動に対して、思いの丈が低すぎるという批判や、熱情さの度合いが低すぎるという批判を自分に対して加えている自分がいることを知っていた。以前はこの批判に駆り立てられるように、日々の生活を形作っていたように思う。

年末の日本への一時帰国の際に、隅田川での邂逅を経て、こうした批判を加える者の正体を知って以降、批判によって盲目的に駆り立てられることはなくなったように思う。だが、そうした形で駆り立てられていた活動エネルギーとはまた別次元の別種の活動エネルギーが自分の内側からふつふつと沸き立ち始めていることに気づく。これからしばらくの間は、おそらく、そうした新たな活動エネルギーをもとに、日々の仕事を進めていくことになるのだろう。2017/1/23

679. 知人の書籍とカップ係数の算出

昨日は、とても御世話になっている知人の方が近日出版した書籍に目を通していた。実は午前中は、フラクタルの特徴と分析手法について記述された論文を読み、自分の研究データを再分析することを行う予定であった。しかし、その予定以上に、その方の書籍を読むことの方が重要だという思いがあり、なおかつそちらの方が今この瞬間の自分の興味を引くものであると思ったため、その方の書籍を読むことにした。予想していたように、あるいは、予想していた以上に面白い内容であった。

特に、その方が書籍の中で、私が第二弾の書籍で触れた話題について言及しており、それらの箇所は重点的に丹念に読んだ。また、自分の関心テーマと完全に合致するわけではない箇所からも、多くのことを学ばせてもらったように思う。他者が執筆した文章を読むことによって、確かに他者は自分と異なる内面世界を持っているのだとわかる。もちろん、内面世界が重なる地点や領域はあるにせよ、今の私はそうした共通性よりも、相違性を大切にしたいと思う。

なぜなら、そうした相違性こそがお互いの固有さを示し、同時に、お互いの内面世界がさらに開拓される機会がそこに眠っているように思うからである。午前中はその方の書籍を読んでいたため、当初午前中に予定していた仕事は午後になずれ込む形で取り組むことになった。

午後より、フラクタルに関する論文に目を通し、その後は研究データを再分析していた。具体的には、今回の研究のために、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論をもとに構築した測定手法の信頼性を評価していた。合計で450個ほどのデータセットから無作為に50個を抽出し、その50個に対して、再度レベル分析を行い、以前自分が行った分析とのズレを検証していた。これはつまり、測定者内信頼性 (intra-rater reliability) を評価する作業である。

自分が構築した測定システムであるにもかかわらず、以前の分析と今回の分析が完全に合致することはなかなか難しいのだと改めて思われた。そもそも、450個のデータセットから無作為に50個のデータを抽出したのは、測定手法の信頼性に関するある論文の中で、総データの少なくとも10%のデータを再度検証する必要がある、と記述されていたためだ。総データの10%であれば、45個で良いのだが、念のため50個のデータに対して再分析を行った。この分析をした結果、50個のうち、4個ほど最初の分析と異なるものが検出された。

ズレの理由を確認することに十分時間を取り、その後、検証結果に対してカッパ係数を算出しようとしていた。カッパ係数とは、測定者間信頼性 (inter-rater reliability) のみならず、今回のように測定者内信頼性を評価する際にも用いることができる指標である。今回のケースでは、50個のデータに対して、46個が完全に合致したため、その合致率は92% (46/50) だと早急に結論づけることはできない。なぜなら、偶然に回答が一致したケースも考えられるからである。

そのため、こうした偶然の一致を考慮して合致率を算出しないといけないのだ。こうした偶然の一致を考慮して算出される数値が、カッパ係数と呼ばれる。もちろん、カッパ係数を手計算することもできるが、統計プログラムのSPSSやRを用いて計算することもできる。今回は自分の学習を兼ねて、Rでカッパ係数を算定することと同時に、手計算でもその値を算出したいと思う。その作業は、昨日の夜にできなかったもので、今日の午前中に取り掛かりたい。2017/1/24

今日の午前中は当初の計画通り、研究論文の執筆に取り組んでいた。カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用した測定手法の測定者内信頼性を算出するために、統計プログラムのRを活用した。Rに触るのは久しぶりであったが、どのようなプログラムコードを書けばいいのかを含め、作業手順が随分と自分に定着していることに気づいた。そのため、予想していたよりも苦勞することなく、測定手法の信頼性を示すカッパ係数を算出することができた。

結果は0.944であり、一般的に、極めて高い信頼性を持つとみなされる0.8から1.0の範囲に収まっていた。ただし、私は心理統計学の専門家ではないため、算出の方法を含め、心理統計を専門とする論文アドバイザーの副担当であるスーザンに確認してみようと思う。

とりあえずカッパ係数を算出した後、論文内におけるコーディングシステムに関する章を書き進めていた。参考文献と論文執筆を行き来していると、時が経つのがあっという間であった。気づけば昼食の時間を過ぎていた。

六年前にジョン・エフ・ケネディ大学に留学した時と比べると、英文を書く技術が向上していることに改めて気付く。日本語を書く際にも、語彙の選択や文章の構造を決定するのにある程度の時間を必ず要するが、英語を書く際のそれと比べても、両者はほとんど遜色がなくなっている。それぐらい、英語で文章を書くことが自分に馴染み、非常に自然な行為に変貌を遂げていることに気づく。思い起こしてみると、六年前は、自分の言葉であるはずなのに、なぜ自分が紡ぎ出した英語は自分の言葉のように感じられないのか、ということで頭を悩ませていたように思う。

それから六年間ほど英語と真剣に向き合ってきたことによって、英語という一つの言語体系が自分の深層部分に根ざすようになってきたのだと思う。ある言語体系が自己の深層に根ざし、そこから言葉を紡ぎ出していけるようになるプロセスは、英語のみならず、日本語においても終わりのないものだと思う。

現在、オランダ語を毎日継続的に学習しているが、オランダ語はそうした次元に辿り着く前の段階にある。そのため、少なくとも、日本語と英語の双方に関しては、両者の言語体系がより自己の深層部分に根付いていくように修練を続けていく必要があるだろう。

英語という言語が自己の深い部分に根付き始め、そこから自分の言葉を紡ぎ出せるようになったことに対して、とても嬉しく思う。一昔前のことを思い出すと、英語で文章を執筆している際に、一つのセンテンスと次のセンテンスに移行する際に存在する「虚空な感覚」が非常に薄気味悪いものであったのを覚えている。特に英語の学術論文では、センテンスとセンテンスの繋ぎ言葉に、日本語で言う「そして」「また」という接続詞を多用しない。洗練され、密度が濃いいと感じさせてくれる学術論文ほど、そのような余計な言葉が一切入っておらず、一貫して言葉の緊張感が保たれているのだ。

六年前を振り返ってみると、私は日本語の感覚を引きずりながら、英語の文書を書いてしまう癖が抜け切れておらず、そうした余計な繋ぎ言葉を入れないで文章を書くことに対して、大きな違和感を覚えていたのである。こうした違和感こそが、センテンスとセンテンスの間に溝がある感覚を私に引き起こしていたのだと思う。それが、虚空な感覚の正体である。

一方で、日本語の文章では、そうした繋ぎ言葉のおかげで、文章が自然な形で流れていくというのは実に面白い。両者の言語を用いて文章を執筆している時の自分の感覚を書き留めておくと、日本語の文章を書いている最中は、文と文との連続的なつながりから連続性が生み出され、そこから丸い全体が浮き上がってくる感じである。

一方、英語の文書を書いている最中は、文と文との非連続的なつながりから連続性が生み出され、そこから四角い全体が浮き上がってくる感じがするのだ。そのような感覚的な違いが確かに自分の内側にあるということを、昼食を摂りながらぼんやりと考えていた。2017/1/24